人文論叢（三重大学）第16号　1999

「酔翁」之樂
—歐陽修の文学における吏隠—

湯浅陽子

要旨

本稿では、「酔翁亭記」と「酔翁」という号を中心として、当時の作品に歐陽修が、自己の「吏隠」—官職に就いている者がその生活の中に隠逸的要素を取り込み、これを積極的に楽しもうとするもの—のありようをどのように表現しているかを検討しつつ、そのなかに秘められた内面の葛藤について考える。北宋中期の士大夫層には中唐の白居易の影響を強く受けた「吏隠」が広く受け入れられていたと考えられ、歐陽修もまた初めての任官時から「吏隠」を試みているが、彼独自の姿勢が打ち出されるのは、この滁州期になってからであると考えられる。「酔翁亭記」のなかで歐陽修は、太守を中心とする同心円構造を繰り返し持ち出すことによって、その公的な秩序の安定を強調しようとしているが、この多層構造においては、それぞれの層に属する者は、より内層に属する者の楽しみを知ることができないとされており、同心円の中心でこの遊楽全体を把握する存在である太守自身の楽しみは、孤立した一面を持っていることになる。このように公的存在としての自己のアイデンティティーを強調することは、自らが個人的な左遷者の悲哀へ沈溺することを抑制する働きをも持つと思われるが、また当時の歐陽修の「酔翁」という号は、この号を用いて遊楽する時の彼が日常の覚醒と緊張から離れた存在であることを示すものであり、この号は当時の歐陽修が、世間が自らに与える太守や左遷者といった意味付けや規定から一時的にせよ逃れようとしたことを暗示するものとなっている。また晩年、政界を引退した彼が用いた「六一居士」という号は、引退後の楽しみの対象とされる五つの物と、それらを楽しむ主体である彼自身を合わせた六つが、ひとつの楽しい閑居の世界を構成していることを示すものであるが、ここには自己を楽しみの主体から、楽しみを構成する五つの物と同一のレベルであるひとつの要素に無化しようとする志向を見ることができる。

北宋中期の代表的な士大夫と言うべき歐陽修（一〇〇七—一〇七二『宋史』巻三百十九有伝。）が、彼の膨大な詩文作品のなかでも特に有名な「酔翁亭記」（居士集巻三十九　四部叢刊本による。以下同。）を制作したのは、知滁州（現安徽省滁縣）に左遷中の仁宗慶暦六年（一〇四六）のことであった。

この時の歐陽修が左遷されるに至った経緯を確認しておくと、まず慶暦三年（一〇四三）三月に、三十七歳の歐陽修は通判滑州（現河南省延津市東北）から開封（現河南省開封市）へ召し返され、天子に対して諫言を行う諫院の長官となった。次いで八月には、范仲淹（九八九—一〇五二『宋史』巻三百十四有伝。）が副首相級の参知政事に、

富弼（一〇〇四―一〇八三『宋史』巻三百十三有伝。）が軍政担当副長官である枢密副使となり、十二月に歐陽修は、知制誥となった。慶曆五年（一〇四五）の正月に歐陽修は、眞定府（河北省石家荘市東北）帥の田況（一〇〇三―一〇六一『宋史』巻二百九十二有伝。）に代わり、知府事となったが、三月に、范仲淹、富弼、杜衍（九七八―一〇五七『宋史』巻三百十有伝。）、韓琦（一〇〇八―一〇七五『宋史』巻三百十二有伝。）らが朋党の論議によって罷免されるという事態が発生し、これに対して上書して抗議した歐陽修は、姪の張氏の法に背く行為にかこつけて弾劾され、八月に知滁州に左遷されることになり、十月に任地に到着したのである。①

この滁州という土地は、『宋史』巻八十八地理志四の淮南東路の条と、『元豊九域志』巻五の淮南東路の条のいづれにも上州であると記されており、ここへ知州として赴任することは、左遷といってもそれほど重大なものとは言えないのではないだろうか。しかし左遷の深刻さの度合いはどうであれ、歐陽修はこの滁州に、慶曆八年（一〇四八）正月に、起居舎人に転じ、知制誥に復されて知揚州（江蘇省揚州市）に移されるまでの約二年三か月を過ごしたのである。本稿では、滁州赴任の翌年である慶曆六年（一〇四六）に制作された「醉翁亭記」を中心として、当時の作品に歐陽修が、自己の「吏隠」―官職に就いている者がその生活の中に隠逸的要素を取り込み、これを積極的に楽しもうとするもの―をのありようをどのように表現しているかを考察しつつ、そのなかに秘められた内面の葛藤をも浮き彫りにしてみたい。

北宋中期の士大夫層には中唐の白居易の影響を強く受けた「吏隠」が広く受け入れられていたと考えられ、②歐陽修もまたその流れの中で、既に西京留守推官としての初めての任官時から、官舎に非非堂という閑居のための場を設けるなどして「吏隠」を試みているが、彼自身の独自の「吏隠」の姿勢が強く打ち出されるのは、この滁州期になってからであると考えられる。

一　醉翁亭

ではまず「醉翁亭記」の冒頭の部分を見てみよう。

環滁皆山也。其西南諸峯、林壑尤美、望之蔚然而深秀者、琅邪也。山行六七里、漸聞水聲潺潺而瀉出于兩峯之間者、讓泉也。峯回路轉、有亭翼然臨于泉上者、醉翁亭也。作亭者誰、山之僧曰智僊也。名之者誰、太守自謂也。

滁を環りて皆な山なり。其の西南の諸峯の、林壑尤も美しく、之を望めば蔚然として深秀なるは、琅邪なり。山行すること六七里、漸く水聲の潺潺として兩峯の間に瀉ぎ出づるを聞くは、讓泉なり。峯は回り路は轉じ、亭の翼然として泉上に臨む有るは、醉翁亭なり。亭を作れる者は誰そ、山の僧にして智僊と曰ふなり。之に名づくる者は誰そ、太守自ら謂ふなり。

ここではまず醉翁亭の立地と制作、命名についての説明がなされている。立地の説明に関しては、最初に滁州の周囲を取り巻く山々、次にそのなかの西南に聳える峰々、さらにそのなかでも林や谷がとりわけ美しく、鬱蒼とした緑に包まれた琅邪山、というように、広い視野から徐々に焦点を絞り込んでいく方法が採られている。記述はさらに琅邪山中に分け入り、やがて耳に届くせせらぎの音からその源である讓泉を導き出し、そしてついに泉のほとりの醉翁亭にたどり着くのである。このようなその土地の風景全体を捉えた鳥瞰図から始めて、その後、話題にしようとする箇所だけを次第次第にズームアップしてい

く手法は、この記を読む者に、筆者が酔翁亭をただそれだけで孤立したものとして示そうとしているのではなく、より広い滁州全体の風土と結びついたものとして提示しようとしていることを感じさせ、自らもまた琅邪山中に分け入っていくような感覚を抱かせるだろう。

またこのような手法は、例えば中唐の白居易が自己の洛陽退居後の閑居の場について述べた「池上篇」序（白居易集箋校巻六十九　上海古籍出版社　中國古典文學叢書）冒頭の次のような記述と類似するものである。

　都城風土水木之勝在東南偏、東南之勝在履道里、里之勝在西北隅、西閈北垣第一第即白氏叟樂天退老之地。

　都城の風土水木の勝は東南に偏りて在り、東南の勝は履道里に在り、里の勝は西北の隅に在り、西閈北垣の第一第は即ち白氏叟樂天が退老の地なり。

白居易はここで風景のより優れた場所という尺度から、「都城」（洛陽）全体、そのなかの東南部、さらにそのなかの履道里、さらにそのなかの西北の隅というように次第に視点を絞り込み、ついに西閈北垣第一第の自邸に焦点を絞るに至っている。このような手法が用いられていることにより、読む者は白居易の邸が風光明媚な洛陽の街のなかの一点であることと、書き手の白居易自身が自邸の素晴らしさをずいぶん誇らしく感じているらしいということを知るのである。

また歐陽修が広い視野から、徐々に視点を絞り込む構造を白居易「池上篇」から取り入れていることは、一方では自ずから彼のこの記が閑居の文学としての伝統および、白居易的な吏隠の文学の系譜に連なるものであることを表明するものとなっていると言えよう。

話を「酔翁亭記」に戻そう。白居易の「池上篇」序ではこのあと、土地の広さと、庭園が次第に整備されていく様子が、そこにある様々な物を具体的に列挙しつつ述べ立てられていくのだが、歐陽修「酔翁亭記」の記述は酔翁亭に辿り着いた後、亭の製作者と命名者について、

　作亭者誰、山之僧曰智僊也。名之者誰、太守自謂也。

　亭を作れる者は誰ぞ、山の僧にして智僊と曰ふなり。之に名づくる者は誰ぞ、太守自ら謂ふなり。

とごく簡単に述べるにとどまっている。この亭の製作者とされる智僊という僧の伝記は未詳だが、次の命名者についての記述には注意すべきであろう。ここで言う「太守」が歐陽修自身を指していることは言うまでもないが、この記述の仕方によって、命名者があくまでも滁州太守、つまり当時の正式な位階で言うところの知滁州軍州事である公人としての歐陽修であり、私人としての歐陽修ではないことが示されているのである。さらにこの記述は、この記で以下に述べられていく酔翁亭での遊楽が、公人である滁州太守のものであることを前もって明らかにするものともなっている。

二　太守としての自己

では滁州太守が行う酔翁亭での遊楽とは、いかなるものであろうか。記の続く部分にはそれが示されている。

　太守與客來飲于此、飲少輒醉而年又最高、故自號曰醉翁也。

　太守は客と與に來りて此に飲み、飲むこと少くして輒ち醉ひ而して年は又た最も高し、故に自ら號して醉翁と曰ふなり。

この部分ではまず、直前に示されていた「酔翁」という亭の名の意味が説明されている。それは、太守が客を伴ってやって来てここで酒を飲み、少し飲むとすぐに酔ってしまい、しかも同座の人々のなかで最も年長であるからだ、ということである。しかしこの記述は、一方

では亭の名の由来を説明するものでありながら、かつもう一方では太守の「醉翁」という自称の理由を説明するものともなっていると思われる。つまりこのような記述によって、「醉翁」亭と「醉翁」たる太守は同一視され得るべき存在であることが示されているのである。

次の部分を見てみよう。

醉翁之意不在酒、在乎山水之間也。山水之樂、得之心而寓之酒也。若夫日出而林霏開、雲歸而巖穴暝、晦明變化者、山間之朝暮也。野芳發而幽香、佳木秀而繁陰、風霜高潔、水清而石出者、山間之四時也。朝而往、暮而歸、四時之景不同、而樂亦無窮也。

醉翁の意は酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の樂は、之を心に得て之を酒に寓くなり。若し夫れ日出でて林霏開き、雲歸りて巖穴暝く、晦明變化するは、山間の朝暮なり。野芳發して香を幽かにし、佳木秀でて陰を繁くし、風霜高潔にして、水清くして石出づるは、山間の四時なり。朝にして往き、暮にして歸り、四時の景は同じからず、而して樂も亦た窮まる無きなり。

ここでは「醉翁」の楽しみの目指すところが提示されている。それによると、「醉翁」という名ではあっても、その楽しみは酒を飲むことそのものにあるのではなく、山水の景物を楽しむことにあるというのである。つまり「醉翁」の飲酒は山水の樂しみを享受するためのひとつの手段に過ぎないのだ。古来、酩酊の境地にこの上ない喜びを見出した人は多く、詩文に表現された例も数知れないが、ここでの歐陽修のように、酒に酔うことを他の目的を達するための一手段として位置づけた例は珍しいのではないだろうか。

さらにこの山水の樂しみを享受するための手段としての飲酒という表現を受けて、記の続く部分では、楽しみの対象とされる山水の景色の、一日の時間帯、また季節ごとにさまざまに変化する様子が具体的に列挙されている。しかしここで列挙される朝靄、夕べの雲、また春の花、夏の木陰、秋の露、冬の水、という景物はこの地にのみ見られるものではないだろうし、取りたてて珍しいものとは言えないのではないだろうか。むしろここでの歐陽修は、そのようなよくあるきれいな風景であっても、それらが互いにに移り変わって現れるさまにはそれなりの趣があり、それらのもたらす楽しみもまた尽きることのないものだと感じているのだろう。

さらに次の段では、このような風景の中に遊ぶ人間の姿が描かれている。

至於負者歌于塗、行者休于樹、前者呼、後者應、傴僂提攜往來而不絶者、滁人遊也。臨谿而漁、谿深而魚肥、釀泉爲酒、泉香而酒洌、山肴野蔌、雜然而前陳者、太守宴也。宴酣之樂、非絲非竹、射者中、奕者勝、觥籌交錯、起坐而諠譁者、衆賓懽也。蒼顏白髮頽然乎其間者、太守醉也。

負ふ者は塗に歌ひ、行く者は樹に休むに至りては、前める者は呼び、後るる者は應へ、傴僂提攜し往來して絶えざるは、滁人の遊べるなり。谿に臨みて漁れば、谿は深くして魚は肥え、泉を釀して酒を爲れば、泉は香しくして酒は冽たり、山肴野蔌、雜然として前に陳ぬるは、太守の宴なり。宴酣の樂は、絲に非ず竹に非ず、射れば中り、奕すれば勝ち、觥籌交錯し、起坐して諠譁するは、衆賓の懽べるなり。蒼顏白髮にして其の間に頽然たるは、太守の醉へるなり。

ここでまず初めに描かれるのは、滁州の人民が山遊びをする様子である。彼らは歌を歌い、呼び掛け合い、手を携えあってにぎやかに楽しげに逍遙している。さらに次に描かれるのは太守の宴であり、その宴には谷川の魚や譲泉の水を醸した酒が供され、当地の山野の幸の豊

かさを楽しむ趣向が凝らされている。宴に連なる人々は酒令や碁に興じ、まことに賑やかだ。

ところで、まず最初に朝夕、また季節ごとにそれぞれの美しさを見せる風景のもたらす楽しみを述べ、その次に滁州の人民の楽しみを、さらに太守の宴の楽しみを描くという手法は、既に見たこの記の冒頭で用いられていた、広い視野から、徐々に視点を絞り込む構造と相似のものではないだろうか。それはむしろ相似というよりも、この構造を継承して、滁州を巡る山々から始めて、描写の対象となる全ての要素を同心円状の円環構造に秩序立てようとしているとも言えるだろう。そして、その同心円の焦点に置かれているのが「太守」なのである。つまり、太守は滁州の自然環境、人民、官吏たちの中心に在って、円環のそれぞれの層に属する自然物の美や人々の楽しむ様子を眺めることを自らの楽しみとしていると言えよう。さらに言えば、美しい自然物が秩序正しく変移し、当地の山野の幸を楽しむことができるのは、気象が安定していることの証であるし、人民と官吏たちが四季を通じて山遊びを楽しむことができるのは、世の中が平穏であることと、滁州が豊かでありかつ治安が安定していることの反映である。つまり、その呼称そのものが公的な存在であることを示す「太守」の楽しみは、やはり極めて公的な立場に立つものとして示されていると言えるのではないだろうか。またここでの「太守」は、「醉翁」という自称のとおりに、酩酊した青顔白髪の衰えた老人として描かれているが、このような老衰した人物でも治めることができると言うことは、それだけこの土地が平穏であることを表すものである。

このように「醉翁亭記」のなかでは、「太守」があくまでも公的存在であることを強調しているのだが、同様の傾向を持つ表現は同じ時期に制作された「豐樂亭記」（居士集巻三十九）にも見ることができる。

豐樂亭は滁州豐山渓谷の泉水を愛でるために設けられたものであり、この記の第一段ではその整備の経緯を記して、「而與滁人往遊其間。（而して滁人と與に往きて其の間に遊ぶ。）」と述べ、やはりここでの遊びを滁の人々と共有されるものとして位置づけている。また第二段では、五代南唐の時代には戦場となった滁州が、宋太祖による征服の後は百年も平和な状態が続き、現在の滁州の人民はかつて戦場であったことも忘れ、閉鎖的ではあるが自足した状態にあると記している。さらに次に掲げる最終段では、これらの叙述を踏まえ、現在の豐樂亭での遊びについて次のように述べている。

> 修之來此、樂其地僻而事簡、又愛其俗之安閑。既得斯泉于山谷之間、乃日與滁人仰而望山、俯而聽泉。掇幽芳而蔭喬木、風霜氷雪、刻露清秀、四時之景、無不可愛。又幸其民樂其歳物之豐成而喜與予遊也。因爲本其山川、道其風俗之美、使民知所以安此豐年之樂者、幸生無事之時也。夫宣上恩徳以與民共樂、刺史之事也。遂書以名其亭焉。慶暦丙戌六月日、右正言知制誥知滁州軍州事歐陽修記。
>
> 修の此に來たるや、其の地の僻にして事の簡なるを樂しみ、又た其の俗の安閑たるを愛づ。既に斯の泉を山谷の間に得、乃ち日び滁人と與に仰ぎて山を望み、俯きて泉を聽く。幽芳を掇して喬木を蔭にし、風霜氷雪、刻露清秀、四時の景、愛づるべからざる無し。又た幸ひに其の民は其の歳物の豐成を樂しみて予と與に遊ぶを喜ぶなり。因りて爲に其の山川に本づき、其の風俗の美を道ひ、民をして此の豐年の樂に安んずる所以は、幸ひに無事の時に生まるるなるを知らしむるなり。夫れ上の恩徳を宣べて以て民と樂を共にするは、刺史の事なり。遂に書して以て其の亭に名づく。慶

暦丙戌六月日、右正言知制誥知滁州軍州事歐陽修記。

ここでまず最初に登場する「修」は筆者の諱であり、この地に赴任して片田舎なので仕事が楽なのを嬉しく思い、また風俗の穏やかさに好感を持った、個人としての歐陽修を表すものであろう。しかし遊楽について記した続く部分では、やはり公人としての顔が強調されている。

筆者はこの泉を得て滁の人々と共に山水の美景を楽しむのだが、次に列挙されている季節ごとの美景の例は、既に見た「醉翁亭記」に列挙されていたものとかなり類似した「よくあるきれいな風景」とでも言うべきものではないだろうか。つまりどちらの記でも強調しようとしているのは、それらがいかなる絶景かということではなく、そのような季節ごとの美しい風景のなかで太守が広く人民と楽しみを共にするということである。「豊樂亭記」はさらに、「幸いにもこの地の人民はその歳の豊作を楽しみ、私と一緒に遊ぶのを喜びと感じている」と述べているが、これも公人である「太守」の視点を反映する記述である。さらに引用した部分の末尾に近いあたりで筆者が、「この地の自然の有り様にもとづきながら、その風俗の美点を述べ、人民にこの豊年の樂に安んじていられるのは、幸いに平和な時代に生まれたからであることをわからせようと思う」と述べるのはその視点を非常に明確に表明するものである。皇帝による独裁的な中央集権国家という形を取る当時の社会においては、公人である地方太守の遊楽には、このように人民に公開、共有され、天下に太平をもたらした皇帝の恩恵を顕揚するという一種の大義名分が必要とされたのである。それは気楽な楽しみというよりも、この記で歐陽修自身が言っているように、むしろ「刺史之事」、太守の仕事の一環だったと思われる。

ところで地方太守の吏隠において公的立場をこのように強調するのは、歐陽修の作品に限られたものではない。一例として韓琦が知相州（現河南省安陽市）に在任していた至和三年（一〇五六）に制作した「相州新修園池記」（安陽集巻二十一　四庫全書本）を挙げてみよう。韓琦はここで、相州はかつては軍事上の要地であったが、宋朝の統一によって平和がもたらされた現在では、もはや無用のものとなった武器が放置されたままになっていると記し、さらに、そこで自らの着任後、牙城を拡張した際に、その内側にこれらの武器を収納する武器庫を建て、また整備されないままで放置されていた官舎裏の庭園を拡張整備し、一方、牙城の外側には「康樂園」と名づけた庭園を整備したと述べている。

さらに続く部分で、韓琦はこの「康樂園」について次のように述べている。

既成而遇寒食節、州之士女、無老幼皆摩肩躡武來游吾園。或遇樂而留、或擇勝而飲、歎賞歌呼、至徘徊忘歸。而知天子聖仁、致時之康、太守能宣布上恩、使吾屬有此一時之樂、則吾名園之意、爲不誣矣。

既に成りて寒食節に遇ひ、州の士女、老幼無く皆な摩肩躡武して來たりて吾が園に游ぶ。或ひは樂に遇ひて留まり、或ひは勝を擇びて飲み、歎賞歌呼し、徘徊して歸るを忘るるに至る。而して天子の聖仁にして、時の康きを致し、太守の能く上恩を宣布し、吾が屬をして此の一時の樂有らしむるを知れば、則ち吾の園に名づくるの意は、誣ひざると爲さん。

この記述からは、牙城の外にある「康樂園」が、時期を決めて人民に庭園を公開することによって、天下の太平をもたらした皇帝の恩恵を感じさせる、教化の場として設けられたものであることが明らかであろう。[3]つまりこの庭園には初めから公共性が強く意識されているの

である。既に述べたように、韓琦は牙城の内側には官舎裏の庭園を拡張整備しており、「康楽園」と対比されるこの庭園は、知事の私的な楽しみや官吏らとの使用に供されるものとしての役割を持っていたと思われる。つまり韓琦はここで知事の公的な立場に立った公開される吏隠と、より私的な楽しみとしての吏隠を区別しているのである。

北宋期の地方官、特に知事の吏隠においては、まず治世者としての公的な責任の完遂が求められ、その上で知事の個人的な楽しみを追求すべしとする順序が一般的に認識されていたと思われ[4]、それは歐陽修の「夷陵先春亭記」や、その一世代後の蘇軾（一〇三六－一一〇一『宋史』巻三百三十八有伝。）の「超然臺記」等の表現に反映されているが、ここでの韓琦の二つの庭園の対比からは、吏隠を公的なものとより個人的な性格の強いものに二分してそれぞれの充足を求める意識をも読み取ることができる。

ここで歐陽修の「醉翁亭記」の記述を振り返ると、この亭をめぐって人民、官吏、賓客たちとともに享受されているのは、あくまでも知事の公的な遊楽としての吏隠である。したがってその遊楽を同心円状の構造に秩序立てて描き、その中心に酩酊の知事の姿を置くことは、すなわちこの地の秩序の安定、ひいては宋朝の治世の安定を言祝ぐ意味を持つものと言えよう。

では「醉翁亭記」の末尾の部分を見てみよう。

已而夕陽在山、人影散亂、太守歸而賓客從也。樹林陰翳、鳴聲上下、遊人去而禽鳥樂也。然而禽鳥知山林之樂、而不知人之樂、人知從太守遊而樂、不知太守之樂其樂也。醉能同其樂、醒能述以文者、太守也。太守謂誰、廬陵歐陽修也。

已にして夕陽山に在り、人影散亂し、太守歸りて賓客從ふなり。樹林陰翳し、鳴聲上下し、遊人去りて禽鳥樂しむなり。然るに禽鳥は山林の樂を知るも、人の樂を知らず、人は太守の遊に従ひて樂しむを知るも、太守の其の樂を樂しむを知らざるなり。醉ひては能く其の樂を同じうし、醒めては能く述ぶるに文を以てするは、太守なり。太守とは誰をか謂ふ、廬陵の歐陽修なり。

楽しい一日が終わり、夕暮れ時になると、山遊びする滁の人々の姿はまばらになり、太守もまた客たちを伴って帰っていく。そして人間たちが帰った後、今度は木立のなかで鳥たちが楽しげに鳴き交わす[5]。醉翁亭の置かれた山中は、人々が去っても依然として幸福な楽園であり続けるのである。

この部分の鳥、人々、太守のそれぞれが知っている楽しみについての記述には、やはり先の部分に見られた同心円的な多層構造が持ち込まれているが、ここでは新たに、それぞれの層に属する者は、より内側に属する者の楽しみを知ることができない、という各層間にある断絶性に言及していることに注意すべきであろう。つまりそれぞれの層に属する者は、この楽全体を見渡す総合的な視点を得ることはなく、彼らは各々の楽しみを味わっているに過ぎないのである。しかしまた外層からの視点ではこのように没交渉なそれぞれの層の楽しみは、同心円の中心にいる太守の視点からはすべて見渡され、総合され得るものである、という状態が同時に成り立つと考えられている。このように当地の個々の対象の全てを把握する者として太守を描くことには、太守自身の為政者としての自負の強さが感じられるが、さらに記の末尾には、この記の書き手が太守自身であることが記されているので、記全体を通して保持されてきた公人としての自己規定が、末尾においてもう一度強調されていると言うことができよう。

三　醒と醉

このように「醉翁亭記」のなかで歐陽修は、太守を中心とする同心円構造を繰り返し持ち出すことによって、その公的な秩序の安定を強調しようとしていた。しかし、既に見たようにこの多層構造においては、それぞれの層に属する者は、より内層に属する者の楽しみを知ることができないと考えられているのだから、同心円の中心でこの遊楽全体を把握する存在である太守自身の楽しみは、実は誰からも理解されていない、孤立した一面を持っているとも言えるのではないだろうか。そこで次に本章では、太守たる歐陽修自身の楽しみがいかなるものであるかについて、当時の彼の詩文の表現から考えてみたい。

「醉翁亭記」末尾の、太守自身に関する「醉ひては能く其の樂を同じうし、醒めては能く述ぶるに文を以てする」という表現は、この記の寄せられた亭の名であり、かつ太守自身の号でもある「醉翁」を意識するものだが、ではなぜ太守歐陽修は「醉翁」をその号とし、自己を酩酊の状態に描かねばならなかったのだろうか。

自らの「醉翁」という号に関して歐陽修はこの記のなかで、

太守與客來飲于此、飲少輒醉而年又最高、故自號曰醉翁也。
太守は客と與に來りて此に飲み、飲むこと少くして輒ち醉ひ而して年は又た最も高し、故に自ら號して醉翁と曰ふなり。

と述べ、「醉翁」とは、太守たる自分が共に遊楽ぶ人々のなかで最も年長で、かつ酒に酔いやすいことを表したものであると説明していた。

また、既に見たように、

醉翁之意不在酒、在乎山水之間也。山水之樂、得之心而寓之酒也。
醉翁の意は酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の樂は、之を心に得て之を酒に寓くなり。

では、酩酊の状態を山水の美景を楽しむための手段であると述べていたが、さらに記の末尾では、「醉能同其樂、醒能述以文者、太守也。（醉ひては能く其の樂を同じうし、醒めては能く述ぶるに文を以てするは、太守なり。）」と、酩酊の状態の後に来るべき覚醒を予感し、醒と醉のそれぞれの状態を対比してもいた。これらの表現からは、この「醉翁亭記」においては、書き手である太守の、自己の醒と醉の状態に対する対比的な把握の仕方が、重要な意味を持っていることが推測されるだろう。またさらに視点を広げるならば、歐陽修が自己の醒と醉を対比的に表現する例は、この「醉翁亭記」以外にも滁州期の詩文作品のなかに散見しており、これらには当時の彼の心境が特に投影されているのではないかと考えられる。次にその例を挙げてみよう。

「題滁州醉翁亭」詩（居士外集巻三）

四十未爲老　四十は未だ老爲らざるに
醉翁偶題篇　醉翁もて偶たま篇に題す
醉中遺萬物　醉中　萬物を遺るれば
豈復記吾年　豈に復た吾が年を記えんや
但愛亭下水　但だ愛す　亭下の水の
來從亂峯間　亂峯の間より來るを
聲如自空落　聲は空より落つるが如く
瀉向兩簷前　瀉ぎて兩簷の前に向かふ
流入巖下溪　流れて巖下の溪に入り
幽泉助涓涓　幽泉　涓涓たるを助く
響不亂人語　響きは人語を亂さず
其清非管絃　其の清きは管絃に非ず

豈不美絲竹　豈に絲竹より美しからずや
絲竹不勝繁　絲竹は繁に勝へず
所以屢携酒　所以　屢しば酒を携へ
遠歩就潺湲　遠歩して潺湲たるに就く
野鳥窺我醉　野鳥は我が醉ひを窺ひ
溪雲留我眠　溪雲は我が眠りを留む
山花徒能笑　山花は徒らに能く笑むも
不解與我言　我と與に言ふを解せず
惟有巖風來　惟だ巖風の來たる有りて
吹我還醒然　我を吹きて還た醒然たり

醉翁亭に寄せられた詩であるが、ここでは先に見た記のように太守としての公的な立場が強調されることはなく、詩の作者はより個人的な視点に立って山水の景物に対していると思われる。冒頭でまず「醉翁」という名が年齢を意識するものではなく、全てを忘れることのできる酔中の境地を楽しむことを表すものであると言明した後、詩はこの亭をめぐる水が高い峯の間から流れ来て泉の水と合流し、さわやかな響きを立てる様子を描写していく。穏やかなその音は、この場においては人工の音楽よりもなおいっそうふさわしいものと感じられ、詩人はしばしば酒を携えて水辺に遊ぶ。

次の四句に描かれるのは酔中に見る情景である。酩酊の「我」をのぞき込む野鳥と「我」の眠りを守る雲、笑みを見せる物言わぬ山の花、ここに描かれているのは、みな「我」をいたわる擬人化された優しい自然物である。言うまでもなくこれらの姿は詩人が酔中に見る幻想にすぎないのだが、それらはまた、好意に満ちているとは言い難い人間の世界に生きる「我」の切ない夢想であるとも言えよう。

しかし夢は永続するものではなく、ここでも詩の末尾では岩壁を吹き抜ける風が「我」を覚醒へと呼び戻している。しかしここで「我」に吹きつけ「醒然」たる状態をもたらす「巖風」は、決して「我」の気を重くさせるものとしては描かれていない。むしろここには爽やかな心地よさが漂っていて、「我」にとって、覚醒への帰還が喜ばしいものと感じられていることを窺わせるものとなっている。

また「豐樂亭遊春三首」詩の其一（居士集巻十一）には次のような表現を見ることができる。

緑樹交加山鳥啼　緑樹　交加して　山鳥啼き
晴風蕩漾落花飛　晴風　蕩漾して　落花飛ぶ
鳥歌花舞太守醉　鳥歌ひ　花舞ひ　太守醉ひ
明日酒醒春已歸　明日　酒醒めれば　春已に歸さん

枝を交わらせて茂る緑の木々、その間から聞こえる山鳥の声。晴れた空の明るい日差しを受けたそよ風が、散り落ちる花びらをただよわせる。転句では、妓女のような所作に擬人化された鳥と花が酩酊の太守を包み込んでいる。この場は今、太守にとって至福の楽園である。しかし詩の作者である太守はその至福に陶酔し続けることはできず、結句では明日の覚醒、さらにはこの幻想の楽園の消滅の予感を記さねばならない。これは前に挙げた「醉翁亭記」や「題滁州醉翁亭」詩と同様の発想であり、この詩が豐樂亭に寄せられたものであることから、醒酔の状態を対比させる意識が、醉翁亭のみに限定されるものではないことが理解されるだろう。

ところで、実は当時の歐陽修は、豐樂亭のそばに「醒心」と名づけた亭を作っているのである。歐陽修自身はこの醒心亭に関する詩文を制作していないのだが、彼の親しい友人であった曾鞏（一〇一九―一〇八三『宋史』巻三百十九有伝。）が「醒心亭記」（元豐類稿巻十七四部叢刊本）を寄せており、そこではこの亭について次のように述

べている。

滁州之西南、泉水之涯、歐陽公作州之二年、構亭曰「豐樂」、自爲記以見其名之意。既又直豐樂之東幾百歩、得山之高、構亭曰「醒心」、使鞏記之。凡公與州之賓客者遊焉、則必即豐樂以飲。或醉且勞矣、則必即醒心而望。以見夫群山之相環、雲烟之相滋、曠野之無窮、草樹衆而泉石嘉、使目新乎其所覩、耳新乎其所聞、則心洒然而醒、更欲久而忘歸也。故即其所以然而爲名、取韓子退之「北湖」之詩云。噫、其可謂善取樂於山泉之間、而名之以見其實、又善者矣。

滁州の西南、泉水の涯、歐陽公 州と作るの二年、亭を構へて「豐樂」と曰ひ、自ら記を爲りて以て其の名の意を見はす。既に又た豐樂の東幾百歩に直り、山の高きを得、亭を構へて「醒心」と曰ひ、鞏をして之を記さしむ。凡そ公 州の賓客たる者と焉に遊べば、則ち必ず豐樂に即きて以て飲む。或ひは醉ひ且つ勞れれば、則ち必ず醒心に即きて望む。以て夫の群山の相ひ環り、雲烟の相ひ滋く、曠野の窮まる無く、草樹衆くして泉石嘉するを見、目をして其の覩る所を新たならしめ、耳をして其の聞く所を新たならしむれば、則ち心は灑然として醒め、更に久しからんと欲して歸るを忘るるなり。故に其の然る所以に即きて名と爲し、韓子退之の「北湖」の詩を取りて云ふ。噫、其れ善く樂を山泉の間に取ると謂ふべし、而して之に名づけて以て其の實を見はすは、又た善き者かな。

これによると、滁州の歐陽修は賓客たちとの遊楽の際、まず豐樂亭で酒を飲み、酔いがまわると今度は醒心亭で眺望を楽しんだという。また曾鞏は「醒心」という名が韓愈「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」（韓昌黎詩繫年集釋巻八　上海古籍出版社　中國古典文學叢書）のなかの「北湖」詩に基づくものだとも述べている。韓愈のこの詩は、

聞説游湖棹　　聞説く　湖に游ぶ棹
尋常到北迴　　尋常　北に到りて迴ると
應留醒心處　　應に醒心の處に留まりて
準擬醉時來　　醉時に來るを準擬すべし

というもので、「醒心」の状態を「醉時」と対比させ、酩酊の状態を山水の美を楽しむに適したものとみなす点で、歐陽修の諸々の表現のさきがけとなるものと言えよう。しかしこの韓愈の詩には、歐陽修のように酩酊の状態を一時的なものに過ぎないもの、またそうあるべきものとする考えは反映されていないので、酩酊を一時的なものと考えるのは歐陽修の独創であろうかという疑問が残る。[6]

ところで、歐陽修が特に好んだ過去の詩人としては、盛唐の李白（六九九―七六二『舊唐書』巻一百九十下文苑傳下、『新唐書』巻二百二文藝傳中有伝。）を挙げることができるだろうが、[7]「一斗詩百篇」と評された李白はまた酒を好んだ詩人として特に有名でもある。では李白の詩の中では醒酔の状態の対比はどのように表現されているのだろうか。一例として「月下獨酌四首」其一（李太白全集巻二十三　中華書局　中國古典文學基本叢書）を取りあげ、その表現を歐陽修のものと比較してみよう。

花間一壺酒　　花間　一壺の酒
獨酌無相親　　獨酌　相ひ親しむ無し
擧杯邀明月　　杯を擧げて明月を邀へ
對影成三人　　影に對して　三人を成す
月既不解飲　　月は既に飲を解せず
影徒隨我身　　影は徒らに我が身に隨ふ

暫伴月將影　暫く月と影とを伴ひて
行樂須及春　行樂　須らく春に及ぶべし
我歌月徘徊　我　歌へば　月　徘徊し
我舞影零亂　我　舞へば　影　零亂す
醒時同交歡　醒時　同に交歡し
醉後各分散　醉後　各おの分散す
永結無情遊　永く無情の遊を結び
相期邈雲漢　雲漢遙かなるを相ひ期す

李白は花の間で一人酒を飲んでいる。親しい人もいないので、明月と影法師と李白は三人の仲間になる。歐陽修の場合は左遷地の孤独、そして太守として当地の人々の同心円の中心にあっても、周囲からその心を推察されることがないという孤独感から逃れて、酔中に見る花と鳥とが自分を思い遣ってくれるという幻想を描いていたが、これは李白のこの詩と類似する発想と言えよう。しかし李白の場合は、月は酒を飲むことを理解せず、影法師も私にくっ付いているだけのものとされていて、それらは歐陽修の詩のように人間を思い遣ったりすることはない。さらに両者の大きな違いは、歐陽修の飲酒が山水の美景を楽しむための手段であるのに対して、李白は「素面のうちは一緒に楽しんでいるが、酔っ払ってしまったらばらばらになる。」と述べている点である。李白はこの「月下獨酌五首」の其二でも、

三盃通大道　三盃　大道に通じ
一斗合自然　一斗　自然に合す
但得酒中趣　但だ酒中の趣を得て
豈爲醒者傳　豈に醒者の傳爲らんや

と述べ、また「將進酒」（李太白全集巻三）でも

鐘鼓饌玉不足貴　鐘鼓　饌玉　貴ぶに足らず
但願長醉不用醒　但だ願ふ　長く醉ひて醒むるを用ひざるを

と述べているが、どちらも酔中の境地にあることを望むものである。これは歐陽修が酔中の境地を楽しみながらも、そのあとに必ず冷静な覚醒があることを確信しているのとは相反するものである。[8]

ではなぜ歐陽修はかくも覚醒を予感し、また期待するような表現を重ねるのだろうか。彼は覚醒の中に何を見ようとしているのか。歐陽修は酔中で自分を優しくいたわってくれる存在として、花や鳥を夢想していたが、当時歐陽修が制作した「啼鳥」詩（居士集巻二　慶曆六年）は、この地で耳にする鳥の声を列挙し、それらが人間の生活に溶け込んでいる様子を描いた後、詩の後半で次のように述べている。

其餘百種各嘲哳　其の餘　百種　各おの嘲哳するも
異鄉殊俗難知名　異鄉　俗を殊にすれば名を知り難し
我遭讒口身落此　我は讒口に遭ひ　身は此に落つ
每聞巧舌宜可憎　每に巧舌を聞けば宜しく憎むべし
春到山城苦寂寞　春　山城に到れば　寂寞に苦しみ
把盞常恨無娉婷　盞を把り　常に娉婷無きを恨む
花開鳥語輒自醉　花開き　鳥語り　輒ち自ら醉ひ
醉與花鳥爲交朋　醉ひて花鳥と交朋と爲る
花能嫣然顧我笑　花は能く嫣然と我を顧みて笑み
鳥勸我飲非無情　鳥は我に飲むを勸めて情無きに非ず
身閑酒美惜光景　身は閑　酒は美く　光景を惜しみ
惟恐鳥散花飄零　惟だ恐る　鳥散じ　花飄零するを
可笑靈均楚澤畔　笑ふべし　靈均　楚澤の畔に
離騷憔悴愁獨醒　離騷　憔悴して　愁ひて獨り醒むるを

ここでも既に見たいくつかの詩と同様に鳥と花は、酒の相手をする

美女の代わりとして、酔中の幻想では人間と同じように、もしくは人間よりもやさしいものとして描かれている。しかしここでは酔いから覚めてこれらの幻想が消えてしまうことへの恐れが素直に述べられており、覚醒は屈原的な孤独に苦しむ時間として避けられているのである。醒と酔を対比的に捉えるのは、言うまでもなく屈原、特に具体的には『楚辭』「漁父」の表現に溯れるものであるし、また衆人に迎合してともに糟を食らい漓を啜ることのできない醒めた屈原は、そのために国を追われて孤独を強いられねばならない正義の人として典型化された存在であったとも言えよう。そして古い時代から、自らの正義が世に容れられないことを悲しみかつ憤る左遷者たちは、悲劇の人である屈原に自らを重ねてきたのだった。このような伝統の流れを受けて、滁州左遷中の歐陽修もまた、屈原の悲哀を自らに親しいものとして感じていただろう。本稿ですでに見てきたように、当時の彼の詩文にしばしば描かれる酩酊の時間は、このような屈原的な悲哀の緊張から彼が逃れることが一時的にせよ許される場なのであり、それは花や鳥と心を通わせることのできる至福の時という姿で描かれていた。しかし歐陽修は、このような至福の楽園が永続するものでないことを冷静に予感し、その予感をも詩文に書き加えている。そこには楽園への名残惜しさが綿々と綴られる事はなかったし、むしろ彼がそこに留まることを欲せず、潔く覚醒の緊張への中へ帰って行こうとしていることを感じさせた。

　では覚醒した歐陽修の感じている緊張とはどのようなものだったのだろうか。次に示す「寶劍」詩（居士集巻三　慶暦七年）は、当時の彼の精神の緊張した状態を窺わせるものであろう。

寶劍匣中藏　　寶劍　匣中に藏せば
暗室夜常明　　暗室　夜　常に明るし
欲知天將雨　　天　將に雨ふらんとするを知らんと欲せば
鏘爾劍有聲　　鏘爾として劍に聲有り
神龍本一物　　神龍と本と一物なれば
氣類感則鳴　　氣類　感ずれば則ち鳴る
常恐躍匣去　　常に恐る　匣より躍りて去り
有時暫開鐍　　有時　暫らく　鐍を開かんことを
煌煌七星文　　煌煌たり　七星の文
照曜三尺冰　　照曜たり　三尺の冰
此劍在人間　　此の劍　人間に在れば
百妖夜收形　　百妖　夜　形を收めん
姦兇與佞媚　　姦兇と佞媚と
膽破骨亦驚　　膽破れ　骨も亦た驚かん
試以向星月　　試みに以て星月に向かへば
飛光射欃槍　　飛光　欃槍を射る
藏之武庫中　　之を武庫の中に藏せば
可息天下兵　　天下の兵を息むべし
奈何狂胡兒　　奈何せん　狂胡兒の
尚敢邀金繒　　尚ほ敢へて金繒を邀ふるを

箱の中にしまい込まれている宝剣は、暗い室内を照らし、雨を感知すると唸るような音を立てるという神秘的な力を秘めたものである。それはまた邪な者を退け、天下の戦を停止させる正義の剣でもある。この詠物の詩がいかなる機会に制作されたのかは明らかでないが、左遷中の作であることを思えば、「箱の中に封じ込められた正義の剣」は当時の歐陽修自身の状態の寓意ともなり得るものだろう。さらにこの剣は今にも箱の中から躍り出そうな生気を放ち、また氷のように冷たく耀いているとも表現されており、そこには強固な自意識と、それ

と表裏の関係にある鋭く冷ややかな悲哀を見ることもできよう。

また同じ慶暦七年の「拒霜花」[9]詩（居士集巻三）で歐陽修は、菊の花がほんの一時であっても、霜や風をものともせず鮮やかに咲く姿を描き、最終聯では「莫笑黄菊花、籬根守憔悴。（笑ふ莫かれ黄菊の花、籬根に憔悴を守るを。）」と、ついに季節が過ぎて萎れた花に共感を覚えている。冷たい季節に抗おうとする菊の花は、これもまた失意の歐陽修自身の寓意になりうるものだろうし、その寒気のなかの生き生きとした黄色い色は、逆境に立ち向かおうとする彼の強い意識を表すものではないだろうか。

歐陽修が当時の詩のなかでこのように繰り返し表現しようとしている失意や逆境に立ち向かっていこうとする意識は、自らの個人的な悲しみに沈み込むことを避け、伝統的な屈原的孤立者の悲哀の定型から脱しようとする志向を反映するものと考えられる。また一方で酩酊は伝統的に、個人的な悲哀やより普遍的なものである時間の無常の悲哀から逃れるための手段とされてきたものであり、歐陽修がその伝統を継承しながらも、酩酊が一時的な慰めでしかないことを強調するのは、自分の中にある悲哀を目をそらさずに直視し続けようとする志向、より強い精神性をもって悲哀を乗り越えようとする志向を示すものではないだろうか。

既に前章までで見たように、碑文等に彫られることによって公開され不特定多数の人々の目に触れるものである「記」では、歐陽修は公的存在としての自己と、皇帝の恩恵による社会の平和な状態を強調していたが、このような公的存在としての自己のアイデンティティーを強調することもまた、自らが個人的な悲哀へ沈溺することを抑制する働きをも持っていたのではないだろうか。

四　「醉翁」から「六一居士」へ

結局、知滁州期の歐陽修の「醉翁」という号は、この号を用いて遊楽する時の彼が日常の覚醒と緊張から離れた存在であることを示すものであったと言うことができよう。つまりこの号は当時の歐陽修が、世間が自らに与える太守や左遷者といった意味付けや規定から一時的にせよ逃れることを目指して、自らに与えた名前なのである。言い換えれば、「醉翁」という号は、日常的には覚醒した太守でありまた悲哀に苦しむ左遷者でもある歐陽修が、自ら一時的に付け、また取り外すことのできる、気楽で陽気な顔つきをした仮面なのであるとも言えよう。決して、日々の生活を送る彼が何時でも「醉翁」であり得たわけではないのである。

ところで歐陽修にはもう一つ号がある。「六一居士」というこの号は、晩年、政界を引退し潁州に閑居した彼が用いたものであり、彼自身が「六一居士傳」（居士集巻四十四）に記しているように、これは書、金石遺文、琴、碁、酒という引退後の閑居の楽しみの対象となる五つの物と、それらを楽しむ主体である彼自身を合わせた六つが、ひとつの楽しい閑居の世界を構成していることを示すものである。[10]この五つの物のなかには酒が含まれているが、歐陽修はこの作品のなかで、これらの物を楽しむ自分が酩酊の状態であることを強調していない。つまり引退して公人ではなくなった彼は、もはや酩酊の状態を借りずに楽しい閑居を謳歌することができるようになったのではないだろうか。

この「醉翁」から「六一居士」への号の変更について、「六一居士傳」で「客」は笑いながら次のように「居士」に意見している。

子欲逃名者乎。而屢易其號、此荘生所誚畏影而走乎日中者也。余

將見子疾走大喘渴死、而名不得逃也。

子は名より逃れんと欲する者か。而して屢しば其の號を易ふるは、此れ莊生の誚むる所の影を畏れて日中を走る者なり。余　将に子の疾走大喘して渇死せんとするも、名より逃るるを得ざるを見ん。

後を付いてくる自分の影を畏れて逃げる人の話は『莊子』漁父を踏まえたものだが、ここでは自ら付けた号を変えることもまた、自分が自分に与えた特定の意味付けを逃れようとするものであるという危険性を指摘している。つまり、世間が自らに与える特定の意味付けから逃れることを求めた「醉翁」という号も、歐陽修が自己を規定した「名」に過ぎず、この「名」から別の新しい「名」に変えたところで、その「名」もまた彼を新たに規定するものとならざるを得ないのである。さらにこの言葉に対して「居士」は次のように答えている。

吾固知名之不可逃、然亦知夫不必逃也。吾爲此名、聊以志吾之樂爾。

吾　固より名の逃るるべからざるを知れり、然るに亦た夫の必らずしも逃れざるをも知るなり。吾　此の名を爲し、聊か以て吾の樂を志すのみ。

ここで「居士」は、この「六一居士」という「名」が自分の楽しみを記しただけのものだと答えている。つまりこの新しい「名」は自己に特定の規定や役割を与えるものではないというのだ。いまや「醉翁」ではなくなった「六一居士」の樂は、むしろ自己を楽しみの主体から、楽しみを構成する五つの物と同一のレベルであるひとつの要素に無化することを志向するものではないだろうか。

【注】

① 韓琦「故觀文殿學士太子少師致仕贈太子太師歐陽公墓誌銘」（『安陽集』巻五十）、また王銍『默記』下によると、歐陽修の亡妹の夫である張龜正の前妻の娘が夫の下僕と通じたことを、諫官の錢明逸らが歐陽修を弾劾する言い掛りとし、また歐陽修自身がこの娘の資産を用いて土地等を購入したという嫌疑も掛けられた。調査によって嫌疑は晴らされたが、歐陽修は左遷されることになった。

② 蘇軾を中心とした北宋中期の士大夫の文学作品における白居易的吏隠の受容の様相については、拙稿「蘇軾の吏隠—密州知事時代を中心に—」（『中國文學報』第四十八冊　一九九四年四月）を参照のこと。

③ 韓琦は知定州期にも「衆春園」と呼ばれる庭園を整備し、「定州衆春園記」（安陽集巻二十一）（皇祐三年（一〇五一））に、「於是園池之勝、益倍疇昔、總而名之曰衆春園、庶乎良辰麗節、太守得與吏民同一日之適、遊覧其間、以通乎聖時無事之樂、此其意也。後之人視園之廃興、其知爲政者之用心焉。」と、特定の日に知事が人民と庭園での遊楽を共にすることで、太平をもたらした皇帝の恩恵を感じさせると述べており、相州康樂園と同様の趣旨のものであったと思われる。

④ 知事の吏隠に関する詩文における、公的責務の優先の意識の表現については、前掲拙稿の第一章で考察した。

⑤ 歐陽修「醉翁亭記」を踏まえると思われる梅堯臣「寄題滁州醉翁亭」詩（宛陵集巻三十一）にも同様の表現がある。

⑥ 黄州流謫期の蘇軾が「寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也」詩で、酔裏に見る海棠の花に故郷の幻想を重ね、そこに慰安を感じながらも、明朝酔いから覚めれば幻影が消えてしまうことを予感するのは、この滁州期の歐陽修の表現に学んだものではないかと思われる。拙稿「蘇軾の歸田と買田」（『中國文學報』第五十四冊　一九九七年四月）第二章「黄州」参照。

⑦　歐陽修が李白の詩を特に好んだことについては、例えば劉攽『中山詩話』(『歴代詩話』所収本)に、「歐(陽修)貴韓(愈)而不悦(杜)子美、所不可曉。然于李白而甚賞愛、將由李白超趠飛揚爲感動也。」とある。

⑧　李白の詩のなかで「醒」字が使用されているものとしては、これらの他に「醉後答丁十八以詩譏予搥碎黄鶴樓」(李太白全集巻十九)の「作詩調我驚逸興、白雲繞筆窗前飛。待取明朝酒醒罷、與君爛漫尋春暉。」がある。ここでは明朝、酔いが覚めてからのことに言及しているが、これは相手とともに爛漫たる春を楽しむことを期待するものであり、冷静な覚醒を予感しているのではない。

⑨　この詩の全文は次の通りである。「芳菲能幾時、顔色如自愛。鮮鮮弄霜曉、裊裊含風態。蕙蘭殞秋香、桃李媚春醉。時節雖不同、盛衰終一致。莫笑黄菊花、籬根守憔悴。」また、歐陽修の辞世の詩とされる「絶句」(居士外集巻四)は「冷雨漲焦陂、人去陂寂寞。惟有霜前花、鮮鮮對高閣。」と、この詩と類似のイメージを展開している。

⑩　歐陽修「六一居士傳」の「物」志向に見られる白居易の吏隠の型の受容の様相については、注②に示した拙稿の第三章で考察した。